

## 『自由に書いていい』苦悶

堀池 宏治  
ほりいけ こうじ

私は現在三十一歳です。ついに単身赴任でこの大東京に来ました。仕事に燃え、ようやく何人かの人と知り合いになりました。ある人から、「自由に何か書いてくれ」と言われ、ヨッシャーと返事したのはいいが、いざ原稿用紙に向かうと頭だけ熱くなり目まいがしてきました。このことに正直ビックリして、まずは冷たいビールを飲み、一口、また一口とやっているうち眠くなってしまうのです。「時間はたっぷりあるよ」と言われても前進しない。

ただ面白いことに、会社で書く文書がいかに簡単か、感じてきたのです。マニュアルがあるという事は頭を使っていないということなのか。以前は気が重く、面倒だという感じがあったのですが、その感覚は消え、鼻歌で朝のうち処理するようになりました。「何か書く」とは何だ。自然に過去の自分を見つめることになりました。小中学校のときはサッカーに夢中でしたが、高校は一年生の一学期で中退。このころの自分の悩みはもう過去の事項でおぼろですが、こころの奥の痛み

だけは忘却できません。土方と足場のピケの作業をやっていました。母方の祖母が、「宏治のマスクケ線は一直線で長い。いい手相だ。秀吉さんと同じだ。ゆっくりやりな」と語りかけられ、このままじゃダメだと思いました。まず通信制の高校で日曜日のみ勉強し、なぜか、英語の小文字のbとdが反対称の形であることにずっとひっかかっていたのを記憶しています。自分の中に、突き詰めていく性質が強いのを予感しましたが、その後予備校に入り勉強しましたが、

予備校のセンター試験で一位を取ったときの先生方の反応が面白かったです。大学は同志社の文哲に入りました。ニーチェをやりましたが、いまはどのような肥やしになったのか笑い話です。

ふるさと滋賀県の大津です。私は大津が大好きです。嫁はんも大津出身です。天智天皇が近江大津宮に遷都したところです。延暦寺、日吉大社、石山寺などの古社寺が多く、比叡山と琵琶湖に囲まれ、自然豊かなところです。

東京にきて箱根の向こう側のひとですかと言われ、何故かわざと言われて、会話を楽しんでいる事がわかりました。会話を楽しみ、旬の味をゆっくり楽しむことをようやく知ったこのごろです。「三十一歳、ほんとうに若いですね。うらやましい」と笑っていつているのは本音のようです。七十

歳を超えても現役で生き生き働いている人が多く、朝の電車内は活気があります。このような世界のなかで、やはり自分にとつて大切な人と出会い、本音で語り合い、友人となれることが三十代の目標なのかもしれないと感じています。

このように最近、自分自身が生きること意識的になってきているのは、世代の違う人達と酒場で袂を脱いで会う事と、自由に書くというきつかけができたからだと思ひ始めています。

以前「画家はなぜに自画像を描くのか」と問われて、ひと言もでなかつた。これも驚きだった。自分は本当は何を考えているのか。「自由に書いてもいいは苦闘です」と言ったら、みな明るく笑ってくれた。「自由、これが曲者だ」七十代のひとは、社会学者のフロムが『自由からの逃走』を書

いて、当時はベストセラーだったが、今は知る人もいないだろうと語った。またカラマーゾフの大審問官の話から、やはり自由を持つとは何かの対話になった。「この言葉は古い。徒然草に、よろづ自由にして、大方、人に従うといふことなし、とあるが、意味はぜんぜん違う。リバティでない」

これからは毎日毎日を意識的になろう。でも酒を飲む機会が増えそうです。

#### ●編集部から

堀池さんは一部上場のある会社のサラリーマン、今回、水源地の仲間に入りました。